

博士學位論文審査等報告書

審査委員 主査 大場 修
副査 檜谷美恵子
副査 山川 肇

- 1 氏名
奥矢 恵
- 2 学位の種類
博士（学術）
- 3 学位授与の要件
京都府立大学学位規程第3条第3項該当
- 4 学位論文題目
富士山における山小屋建築の原初形態とその変容に関する史的研究
-吉田口登山道の石室を中心として-
- 5 学位論文の要旨及び審査結果の要旨
【学位論文の要旨】
別紙に記載

【論文目録】
別紙に記載

【審査結果の要旨】

本論文は富士山の山小屋建築の歴史に関する研究である。近世以来の主要な登山路である吉田口登山道の「石室」に着目してその原初形態と変容過程を検討し、山小屋の基盤的形態の規定要因やその空間構造を考察した。

その結果、近世吉田口登山道の石室は「焼山」と呼ばれる高所域の苛烈な環境に対する防御性に依拠して形成され、富士山山小屋建築の原初形態に意義づけられることを明らかにし（第2章）、明治・大正期、吉田口登山道の石室における、洋小屋の導入など近代化の諸相と、保守的状況の両面を指摘し（第3章）、富士登山の大衆化が本格化する戦後に至る時代においては、石積の除去や建替・増改築の進展による開放性の増加、構法の複雑化等の諸相を明らかにした（第4章）。さらに、吉田口を含む富士山4登山道における近世の山小屋を比較検討することで、低山岳域「草山・木山」における板小屋に対して、焼山域における石室の普遍性を確認し、焼山の石室群が富士山特有の山岳景観を形成したことを明確にした（第5章）。

本研究は、富士山の山小屋建築について、

- ・ 草山・木山域と焼山域とで、様相を大きく異にしていること。
 - ・ 富士山の神聖性は、焼山の自然条件における石室により担保されたこと。
 - ・ 石室は、他山に比べ圧倒的に高い富士山の山岳域（焼山）における必然的で普遍的な山小屋形態であること。
 - ・ 石室は苛烈な環境に対する防御であるとともに、神域（焼山）における人工物である山小屋の存在を被覆する意味を持つこと。
 - ・ 石室の近代化は、富士山山小屋の象徴性や歴史性、特異性を自ら毀損する過程であったこと。
- などの諸点を明らかにした。

本研究は、以下の点で学術的価値が高いと判断された。

本論文は、富士山山小屋建築に関する初の体系的論考である。

山小屋という建築類型を取上げた初めての本格的な建築史研究としても意義深い。そもそも、主屋に主眼を置く従来の建築史研究に対して、本研究は、「小屋」の類を俎上に載せた点で画期的である。そのために不可欠な新たな視点や方法論を提起した点も、関係領域への寄与が大である。

本研究は山小屋建築史研究の端緒である。富士山山小屋について、特に高山域（焼山）における「石室」の歴史的、建築的、文化的意義を明確にした点は、今後各地の山小屋建築に関する歴史研究を喚起しよう。本論文の関係分野への波及的意義は甚だ大きなものがある。

また、世界遺産である富士山は、現状の山小屋建築に対する修景的課題を背負っている。山小屋の将来を模索する上で、得られた知見が果たす役割は大きいはずである。本研究の社会的貢献という側面も高く評価しうる。

以上より、本論文は博士論文としての要件を満たすものと評価した。

6 最終試験の結果の要旨

本論文の内容は公開発表会（2019年2月18日（月）午後2時15分～3時15分、稲盛記念会館1階106講義室）にて、本学科教員・学生に他学部教員を交え発表された。40分間の発表の後、20分間の質疑応答が行われた。

主な質疑内容は、富士山ホテル等における明治期の近代化の評価、石室建築の今後、富士山山小屋の独自性、耐震や耐風など災害対応の歴史的状況、など多岐にわたった。質疑応答の状況からは、豊富な登攀調査に裏付けられた申請者の研究課題に関する該博な知識と知見が読み取れ、今後の山小屋の姿を模索するデザイナーとしての視線と課題意識も窺われた。

別途行われた主査・副査による約2時間に渉る審査会においても、申請者が博士号取得に十分な業績と資質を有すると評価された。

以上、最終試験の結果は、公開発表会および審査会の結果を踏まえ、審査員全員一致で合格とした。

以上